平成27年度用

生活科 指導計画作成資料

《目 次》

1 せいかつ 上『あおぞら』下『そよかぜ』の特徴 ……1

2 単元設定の特色 ……3

3 ２年間の単元配列 ……5

4 指導計画作成と教科書との関連 ……7

5 信濃教育会編教師用指導書概要 ……9

一般社団法人
信州教育出版社

1 せいかつ上『あおぞら』下『そよかぜ』の特徴

1 特　徴

県内の多くの学校の実践をもとにした編集

生活科創設当初から採用され，長年にわたる実践を通して編集してきました。

子どもの生活に寄り沿った時系列による構成

子どもの生活や活動・視野の広がりに合わせて，単元を時系列に配列しています。

生活科の本質を見つめた編集

子どもの願いや求めから始まる活動の中で育まれる学びや育ちの姿を明らかにしています。

2 編集にあたって大切にしたこと

- 「人間愛」の育成を基本理念においた編集
- 地域に根ざした教材と直接体験を重視した単元の構成
- 豊かな生活のドラマを作り出す単元の展開
- 生活科ならではの学習の視点を明確にした内容の構成
- 実践にもとづいた子どもの姿や発せられることばの再現
- 合科的指導，他教科・総合的な学習の時間との関連の重視
- 発達段階に応じた活動内容と安全性への配慮
- 子どもの学習意欲を触発する楽しい表示
- 息の長い活動・示唆に富んだ内容

3 子どもの意識や生活にもとづいた構成

生活科では，児童のおもいや願いを育み，意欲や主体性を高める学習過程にすることを大切にしています。そのため，複数の内容で単元を構成することが多くなります。その大前提を踏まえて教師は，素材を適切に選んで教材化していく必要があります。

その際，学習指導要領に示される９つの内容をそのまま単元として示すことは，生活科本来の主旨にそぐわないと考えました。生活科は，内容を子どもに教授するのではなく，子ども自身が自らの生活を創り出していくことが，生活科の究極の目標である３つの自立「生活の自立」「学習の自立」「精神的な自立」への基礎を育むことにつながると考えたからです。

27 年度版の信濃教育会編生活科教科書では，単元を学校生活や季節，発達段階における興味や関心など，子どもの生活に合わせた時系列の構成としています。上巻を１年生，下巻を２年生として見通しをもって，より教室で使いやすくなるよう配慮しました。

① 単元展開をリードする主人公まこと・さとこの設定

子どもたちが主人公と同じ心情や立場になって活動することにより，主体的に生きる姿勢が培えることを願って二人を中心に据えた活動で示しました。

② 気付きの質を高める活動の場の設定・気付きを触発する配慮

子どもがおもいを込めてひたすら活動に打ち込む姿や，比べ，試し，手ごたえのよさによろこび，気付きの質を深める姿，自他のかかわりについて思考したり，追究したり，成就感を得たりする姿などをさし絵や写真で示し，活動の触発や追究意欲の深まりにつながるようにしました。また，多くの学校の実践の中で共通する，子どもの心から生まれた言葉を主人公の言葉として位置づけ，子どもが共感的に読めるようにしました。

③ 発達段階に応じた活動内容と安全性への配慮

それぞれの単元では，多数の学校の長年の実践に裏付けられた活動の中から，発達段階を考慮した題材を取り上げました。また，安全を要する活動場面や気付きを促す場面などは，右のようなキャラクターで明示しました。

2 単元設定の特色

現行学習指導要領に示された内容(8)「生活や出来事の交流」は，それ自体を単元として取り上げていませんが，様々な単元のあらゆる場面で，地域の方や身近な幼児や高齢者，障がい者，外国籍の人などとの交流を通して，自分のありように気付いていく子どもの姿を示しました。

いつもの ばしょ

（上巻 P18.23）

身近な自然とかかわるくらし

この領域では自然をめぐる「原体験」を大事にします。季節を越えて繰り返し野に出ることにより，その自然を心地よいと感じ，自然に応じる心と体を期待します。

いきものと いっしょ

（上巻 P70.71）

生き物とかかわるくらし

多数の学校での実践の裏付けをもとに，ウサギを中核にヤギ・カタツムリ・カイコ・アイガモ・ハムスターなどを示し，選択肢や発展性をもたせました。なおヤギの場合は子どもの発達段階を考慮し，敢えて「子やぎ」という条件を添え，２年生の巻末に飼育活動の収束を示し，生き物とくらしをともにすることの意味を考えてほしいと願っています。

いっぱい みのって

（下巻 P30.31）

植物や作物とかかわるくらし

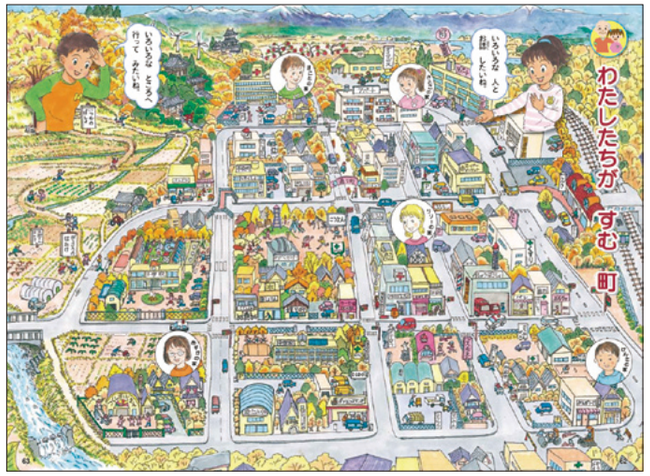
花や作物を大切に育てたり，自らの手で加工し食したりすることは，生活者としての原型です。アサガオやダイズ・小麦を育て，それらを育ててきた自分や，支えてくれた人やものへのおもいを深める子どもを期待します。

わたしたちが すむ 町

（下巻 P62.63）

地域の人やもの・ことにかかわるくらし

身近な幼児や高齢者，障がいのある人，外国籍の人などとの交流を通して，単に人とのかかわり方や接し方を身につけるだけでなく，相手の立場に立って自分のあり様に気付かされたり，相手から生き方や考え方，知恵などを学んだりして，共生社会の大切さに気付いていく姿を示しました。



物づくりを楽しむ

「はしれ はしれ」「すすめ すいすい号」「てづくりおもちゃ」は，身近な材料を使いながら，子どもたちの好奇心や冒険心・疑問を引き出すとともに，試行錯誤しながらも，動くおもちゃや自分たちが乗れる船を自分の手で作り上げていく楽しさや達成感を味わうことを大切にしています。

伝統的な行事を味わう

「たんごの せっく」「たなばた」「おつきみ」「はるの ななくさ」「ひなまつり」という五節句や祭りなど，伝統的な行事を取り上げました。季節に併せて様々な行事を行ってきた人々の営みを実際に調べたり用意をしたりして行うことで，自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできる姿を期待します。

家族とかかわる　小単元「わたしと かぞく」

生活科の学習は，学校生活だけに留まらず家庭においてもその営みは波及して，家庭生活の中に学習成果が発揮されたり，家族が子どもの発見や気付きを共有し合ったり，子どもの育ちを認め合ったりする姿となって現れてきます。そこで，家庭での営みや家族とのかかわりの場面を大事に考え，「家庭の場面からはじまり，家庭の場面で終わる」構成にしました。

自分の成長や活動を振り返る

小単元「大きく なった わたし」「生活科の 二年間」

自分の成長や活動の歩みを振り返ることは，自身の存在感を実感し，周りの人々への感謝の気持ちをもつとともに，これからの自分の生活を，より意欲的に充実させていこうとする育ちにつながります。そこで，様々な手がかりをもとに自身の成長を振り返るようにしました。

3 2年間の単元配列

① 単元名の文字の色は，指導書分冊の２，３，４と対応しています。（●は２「季節とかかわるくらし」，●は３「動植物とかかわるくらし」，●は４「人・ものとかかわるくらし」）
② それぞれの単元のベースの色は，領域的なまとまりを表しています。

1年

春

みんな　ともだち
（いって　きます）

幼保小の円滑な連携が図られるよう，遊びを中核としながら学校生活での活動範囲や視野を広げていく姿をとらえた。地域の人に見守られながらの登下校，遊びや学校探検などを通した上級生や教職員との出会い，施設設備等の認知を通して，自らの手で生活圏を広げ，楽しく安心な学校生活を送れるようになる単元。

はるが　いっぱい

学校の行き帰りに見つけたものや，朝の会の話題などをきっかけに，春の野に繰り返し出かけ，からだごと春の自然事象とかかわったり春の恵みを食したりしながら，自然に対する感受性を磨いていく単元。

たんごの　せっく

いわれややり方を意欲的に調べたり，端午の節句にかかわる活動をしたりして，節句を祝ってくれる家族の気持ちや大事にされている自分を感じることができる単元。

きれいに　さいてね

２年生から贈られたアサガオの種をきっかけに，自分たちの手でつくった鉢（土壌）に種をまき，発芽から開花までの成長を見続けるなかで，アサガオへの親しみをもち，植物の命に触れていく単元。

いきものと　いっしょ①

ウサギなどの生き物と直接かかわることを通して，それらも自分たちと同じように生命をもっていることを実感し，生命あるものへの慈しみの気持ちを深めていく単元。

夏

まぶしい　なつ

夏の様々な事象にからだごと思い切りぶつかり，夏ならではの体験を重ねていくなかで，友だちや自然とのかかわりを深めていく単元。

いきものと　いっしょ②

生き物の成長に伴う変化に応えて，それにかかわる生活をよりよくしていく。ここでは，特に成長に伴う様々な変化に気付くとともに，みんなで協力して，生き物▶◀にとって具合のよい小屋を作るなど，よりよい世話を求めていく単元。

たなばた

七夕のいわれを知ったり，星の世界に浸ったりして，自分たちの願いをもって楽しい「たなばた」にしていく単元。

秋

ひとつぶの　たねから

アサガオの花を咲かせ，種の数を数えたり，観察したり，花や葉の特性を生かした叩き出しや草木染めの作品を制作するなかで，一粒の種のもつ生命に心を寄せるとともに日常生活を工夫して豊かにしていく単元。

みのりの　あき

実りの秋を迎えて，収穫したものをみんなで食して味わうとともに，身近なところにも多くの収穫物があることを知り，収穫のよろこびを味わう単元。

おつきみ

豊作への感謝の気持ちをもち秋を味わうとともに，お月見のいわれ調べやだんご作り，お月見にあった教室の飾りつけなど，自分たちで季節の行事を進めていこうとする単元。

冬

あきが　いっぱい

秋の野に繰り返して出かけ，秋の自然とかかわりを深め，落ち葉や木の実などの感触を味わったり造形遊びやおもちゃづくりを楽しんだりするなど，情感豊かに表現していく単元。

はしれ　はしれ

身の回りにある材料を使って走る車を作るなかで，より真っ直ぐに，より遠くまでという願いをもち，試しては作ることを繰り返し，車軸の位置や付け方などを工夫していく単元。

ふゆも　げんき

寒さも忘れ雪や氷と思い切り遊ぶなかで，冬ならではの楽しみを味わったり，お正月の伝承遊びや季節の行事をおこなったりしながら，春への期待をふくらめていく単元。

ひなまつり

いわれややり方を意欲的に調べたり，ひな祭りにかかわる一連の活動をしたりして，ひな祭りを祝ってくれる家族の気持ち，大事にされている自分や自分自身の成長を感じることができる単元。

わたしたちの　一ねんかん
（ありがとう　一ねんかん）

できるようになったことなどわかりやすい成長だけでなく，目に見えにくい精神的成長までも含めて一年間を振り返ることで，自分自身に自信や希望をもつとともに，友や上級生，家族に感謝の気持ちをもつ単元。

2年

二年生の　春
（きょうから　二年生）

上級生になったよろこびを胸に登校し，新しい友との出会いや教室づくりから２年生をスタートさせていく。いつもの場所に出かけながら，１年生とは違う意欲的・自主的な姿でよりよい学級をつくっていこうとする単元。

れんげえんそく

自分たちの願いの実現のために，目的地までの行き方や手段を調べ，駅へ下見に行ったり持ち物を考えたりする。さらに自分たちで家庭にお知らせを出すなど準備を整えて当日を迎え，目的を果たせたことをよろこび合う単元。

いっぱい　みのって

大豆が動物の食べ物になることや，様々に加工され日常の食生活に欠かすことのできない存在であることに注目して取り組む大豆栽培学習。成長の観察や地域の方への聞き取り，鳥虫害への対応など，課題を乗り越えていこうとする単元。

いきものと　いっしょ③

命の誕生や別れなど，生き物とのくらしを重ねていくなかで，より一層対象への思いを深め，ため込んでいく子どもたち。生き物と共に過ごした日々を表現活動を通して振り返り，共に育ってきた自分自身の成長を実感していく単元。

かがやく　夏

音を通して夏の風物詩を感じ取りながら，日々のくらしや町の様子への視野を広げて自らの生活を豊かにしてゆく。また，地域の川で水遊びをしたり生き物を捕ったりする活動を通して，川と生き物とのかかわりを深め，ふるさとの川への愛着をもつ単元。

すすめ　すいすい号

水遊びをきっかけに，自分たちが乗れる舟を作りたいと願い，その実現に向けて材料を集め，作っては試す活動を繰り返しながら制作していく。出航のときをみんなで迎え，成就感や冒険心を味わう単元。

いっぱい　みのったね

自分たちが育ててきた大豆を収穫し，加工して食すなかで，収穫のよろこびを実感していく単元。

冬と　お正月

お菜洗いなどの冬支度をきっかけにして，冬やお正月にまつわる行事を行い，伝統のなかに存在する人々の知恵や心に触れ，生活を豊かにしていく単元。

わたしと　かぞく

家庭の話題から，自分と家族のつながりを考えたり家族の思いに触れたりして，家族のかけがえのない一人として生活していこうとする単元。

わたしたちが　すむ　町

自分たちの生活は，地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることがわかり，人々と双方向のかかわりをもって接することで，地域の人々や地域に親しみや愛着をもっていく単元。

大きく　なった　わたし

小さい頃を振り返ったり赤ちゃんを抱っこする体験をしたりする中で，自分の成長には多くの人々の支えがあったことを知り，感謝とよろこびをもって生活しようとする単元。

てづくりおもちゃ

いくつかの手作りおもちゃを示し，自分の興味に合わせて選択し作り上げていく単元。

生活科の　二年間
（もうすぐ　三年生）

二年間の学級の歩みや学習記録を振り返り，友や家族に支えられながら仲間と共に成長できたことを実感していく。二年間のなかで見つけた自分のよさや可能性を生かし，３年生の生活に夢と希望を抱く単元。

4 指導計画作成と教科書との関連

● 教科書のプロフィールについて

教師用指導書では，「総説」に教科書の各ページの説明を「プロフィール」として示してあります。これは，子どもたちとともに教科書を開いたときに活動の背景にある意図を十分にくみ取り，単元の指導計画作成の参考にしていただくためのページです。

指導書の各論も，この「プロフィール」の内容をベースに編集しました。

ひとつぶの　たねから

そめがみどうろう　―染め紙から漏れるろうそくの明かりの幽玄美―

「とうろうの下にとうろうが映って，明かりがゆらゆら池に映っているみたい」
「明かりがゆらゆら揺れていて，まるで星の世界のかがやきだよ」
「なんだか，昔の人の気分になったみたい」

暗くした体育館で，一つ一つ灯されていくとうろうの明かりの幽玄美に，子どもたちはそうつぶやきました。このページの写真は，そうした子どもたちの感動のよろこびを写し出しています。

アサガオをはじめマリーゴールドやサルビアなど身近な草花を使い，和紙に染めたとうろうの明かりは，子どもたちを幻想的でロマンチックな世界に導くとともに，あたかも昔にタイムスリップしたかのような気分にまでしてくれたことを語っています。関連的・合科的展開が図れる単元として，扱ってみたい教材です。

また，上述のようなつぶやきは，単元「そめがみどうろう」に対する子どもたちの成就感や達成感として評価してもよい表現であり，大事に取り上げたいものです。

ろうそくは明かりを灯すものですが，この単元では染め紙を通して灯っていたろうそくが消えていき，最後には部屋が真っ暗になるその瞬間の味わいに触れてみることもよいことでしょう。

なお，とうろうの製作にははさみやのこぎり，また明かりを灯す際は火を使うという点からも安全面での指導が必要となってきます。

あきが　いっぱい

―感じる秋，内面的な秋，そして冬を越していのちをつなぐ木の実―

秋は内面的になる季節でもあります。それと同時に，細やかな情緒を形成する季節でもあります。「わあ，黄色と赤の木の葉のシャワー！」辺り一面に降り積もった木の葉の海。体に降り積もるかのように舞い散る木の葉。そんな秋の風情や情緒をからだいっぱいに感じ取っていってほしいと願ってページを構成しました。

れんげばたけ　―自然の中で願いの実現をよろこび合う子ども―

れんげ畑に着いたとき，まさに自分たちが計画し，取り組んできたれんげえんそくが実現できたときのよろこびの瞬間です。チョウやミツバチを見つけ，レンゲソウの花で遊び，ゆったりと寝転んで自然を体で感じている姿を示しました。ここに掲載したリズム詞を読んで，こんな感じで自分たちの体験をつづることもよい学習となるでしょう。学習のまとめに，学習で実感したことを報告し合ったり，聞き合ったりすることも大事にしたいものです。

また，左ページ下には，帰宅して，一日の充実した様子や，　自信がもてた自分をお母さんに報告する姿を示しました。学校生活と家との連携を大切にしたいものの一端として示しました。

なお，この単元は，社会・自然・人とかかわる活動を，一体的・総合的に構成しました。各クラスでは，子どもの実態や願いに応じて内容や学習展開を独自に組み替えることができるでしょう。

5 信濃教育会編教師用指導書概要

平成 27 年度信濃教育会編生活科指導書は，1「総説」，2「季節とかかわるくらし」，3「動植物とかかわるくらし」，４「人・ものとかかわるくらし」の４分冊で構成しています。

この指導書は信濃教育会編生活科教科書「せいかつ」（上「あおぞら」下「そよかぜ」）の内容に対応するとともに，長野県下の実践をもとにしながら編集しました。

学習指導要領に示される生活科の内容は，それ自体が目標であり活動であるという特性があり，詳細な指導事項という形では示されていません。そこが他教科の教科性と大きく異なります。そこで，本指導書では，学習指導要領に準拠した教科書の内容を踏まえて，『生活科の指導書』として次のような編集意図をもって作成しました。

1 指導書に込めた思い

■問題提起的で示唆に富んだ単元や内容を，長野県下の実践をもとに編集しました。

この指導書の実践例は，現場の具体的な実践をもとに，子どもたちが自立への基礎を養う学びにどのように向かっていったのかをていねいに示し，教師の参考になるよう願いました。

■教科書が時系列であるのに対し，指導書は領域的なまとまりを大切にしました。

領域ごとの３分冊にすることで，その単元，その活動ならではの学びの本質を見つめながら授業が展開していくことができるようにするとともに，学習指導要領に示される９つの内容とのつながりを大切にしました。

■活動の選び方や進め方といったマニュアル的な性質を控えてあります。

実践する先生方の主体的な教材研究を大切にするとともに，その学校その学級の子どもの実態にあった素材の教材化ができるように編集しました。それはなによりも，子どもと教師がともに活動を創り上げていくことを大切に考えたからです。

■実践する中で読み深められる指導書であって欲しいと願います。

本指導書の内容は，実践のなかで迷ったり，悩んだり，また，子どもの姿にふと立ち止まったとき，感動したときなど，ともにおもいを共有できる内容にしました。そのために教師のありようや立ち位置，子どもへのまなざしを大切にしてあります。

2 大切にしてきたこと

① 教師を触発し，問題を投げかける

教師自らが，内容や方法を発見的に作っていくことができるように，問題提起したり，触発したりする内容にしました。

教師自身が子どもとともに実践していくにあたって直面する問題を，どのように解決していくかについて考えられる指導書にしました。そのために，子どもの事実にふと立ち止まって考える教師の姿を示しました。

② 教師のありようを問う

子どもの事実から何をどのようにとらえて子どもに寄り添い，支援していくのかなど，子どもをみつめていく教師のありようを示唆する内容にしました。そのために，多くの実践のなかから満足感の味わえる例だけを取り上げるのではなく，失敗したり悩んだりとまどったりしたことも率直に示し，教師の心の内を記しました。

③ 各単元での学習ポイントがはじめにわかる

各単元のはじめの「単元設定の趣旨」で，その単元のもつ価値を，象徴的な子どもの姿などを通して端的に示しました。さらに「単元展開のポイント」は，この単元を展開していく上でのポイントとして具体的に子どもの育ちの姿や教師のありようについて記しました。

④ 学習観・教材観を問い直し，評価を充実させる

何のためにこのくらしや活動が必要なのか，学習観や教材観をもう一度見つめ直し，「単元展開例」や「自立していく子どもの姿」を具体で示すようにしました。また，子どもの学びとは何かを問いながら，子どもの姿をとらえ，評価し，支援する教師の内面を盛り込みました。

⑤ 指導書を４分冊にした扱いやすさ

『総説』には，２年間の「単元配列」や全単元の「プロフィール」を載せ，教科書で表した意図を説明しています。

領域的なまとまりごとの３分冊には，コラムやミニトピックスなどを設けて，実践の具体例を読みやすくしました。

◆◇◆◇◆ 『あおぞら』『そよかぜ』に込めた願い ◆◇◆◇◆

信濃教育会編　せいかつ 上 あおぞら

「あおぞら」も「そよかぜ」も心地よいものの象徴です。

「あおぞら」は自分の目でとらえることのできる対象です。青い空，白い雲，草花や木の葉，テントウムシやハチといった小動物，新しい先生や友だち…。

上巻『あおぞら』の名称は，入学したての子どもたちが視界に広がる対象と，五感を通してかかわり合うことを大切に，心とからだを解放して生活科の学習を展開していってほしいという願いを表しています。

「そよかぜ」は，目では見えないもの，自分のからだでとらえ，感じることのできる対象です。初夏の爽やかな風，川のせせらぎの音，雨上がりの野の香り，共に２年目の春を迎えた友だちとのつながり…。

下巻『そよかぜ』の名称は，子どもの一層の視野の広がりや，五感を研ぎ澄まして，人・もの・ことにかかわってゆく生活科学習の展開への願いを表しています。

信濃教育会編　せいかつ 下 そよかぜ

平成 27 年度用
生活科 指導計画作成資料（平成 26 年 9 月発行）
■編集　公益社団法人 信 濃 教 育 会
■発行　一般社団法人 信州教育出版社
〒 380-0846 長野市旭町 1098
TEL 026-232-0291
FAX 026-232-5058
URL http://shinkyo-pub.or.jp
E-MAIL mado@shinkyo-pub.or.jp

VEGETABLE OIL INK